**受難節第３主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年3月23日**

**「航海」**

**創世記6章9～17節**

 **6:9 これはノアの物語である。その世代の中で、ノアは神に従う無垢な人であった。ノアは神と共に歩んだ。**

 **6:10 ノアには三人の息子、セム、ハム、ヤフェトが生まれた。**

 **6:11 この地は神の前に堕落し、不法に満ちていた。**

 **6:12 神は地を御覧になった。見よ、それは堕落し、すべて肉なる者はこの地で堕落の道を歩んでいた。**

 **6:13 神はノアに言われた。「すべて肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす。**

 **6:14 あなたはゴフェルの木の箱舟を造りなさい。箱舟には小部屋を幾つも造り、内側にも外側にもタールを塗りなさい。**

 **6:15 次のようにしてそれを造りなさい。箱舟の長さを三百アンマ、幅を五十アンマ、高さを三十アンマにし、**

 **6:16 箱舟に明かり取りを造り、上から一アンマにして、それを仕上げなさい。箱舟の側面には戸口を造りなさい。また、一階と二階と三階を造りなさい。**

 **6:17 見よ、わたしは地上に洪水をもたらし、命の霊をもつ、すべて肉なるものを天の下から滅ぼす。地上のすべてのものは息絶える。**

**使徒言行録27章1～12節**

**27:1 わたしたちがイタリアへ向かって船出することに決まったとき、パウロと他の数名の囚人は、皇帝直属部隊の百人隊長ユリウスという者に引き渡された。**

 **27:2 わたしたちは、アジア州沿岸の各地に寄港することになっている、アドラミティオン港の船に乗って出港した。テサロニケ出身のマケドニア人アリスタルコも一緒であった。**

 **27:3 翌日シドンに着いたが、ユリウスはパウロを親切に扱い、友人たちのところへ行ってもてなしを受けることを許してくれた。**

 **27:4 そこから船出したが、向かい風のためキプロス島の陰を航行し、**

 **27:5 キリキア州とパンフィリア州の沖を過ぎて、リキア州のミラに着いた。**

 **27:6 ここで百人隊長は、イタリアに行くアレクサンドリアの船を見つけて、わたしたちをそれに乗り込ませた。**

 **27:7 幾日もの間、船足ははかどらず、ようやくクニドス港に近づいた。ところが、風に行く手を阻まれたので、サルモネ岬を回ってクレタ島の陰を航行し、**

 **27:8 ようやく島の岸に沿って進み、ラサヤの町に近い「良い港」と呼ばれる所に着いた。**

 **27:9 かなりの時がたって、既に断食日も過ぎていたので、航海はもう危険であった。それで、パウロは人々に忠告した。**

 **27:10 「皆さん、わたしの見るところでは、この航海は積み荷や船体ばかりでなく、わたしたち自身にも危険と多大の損失をもたらすことになります。」**

 **27:11 しかし、百人隊長は、パウロの言ったことよりも、船長や船主の方を信用した。**

 **27:12 この港は冬を越すのに適していなかった。それで、大多数の者の意見により、ここから船出し、できるならばクレタ島で南西と北西に面しているフェニクス港に行き、そこで冬を過ごすことになった。**

1.

**私たちの人生はよく旅に例えられます。人生の旅路を歩むのです。ちょうど今卒業のシーズンを迎え、学生の人たちは「旅立ちの時」を迎えています。それまで慣れ親しんだ学び舎から、新たな学び舎にあるいは社会という大海原に旅立っていくのです。その旅路は、波も風も穏やかで順風満帆の時もあれば、あまりに激しい向かい風に転覆しそうなほどの嵐の時があります。地図も羅針盤も舵も役に立たないほどに荒れに荒れる時があるのです。世の荒波にもまれる中でそれでも私たちの人生という船はなんとか前に進んでいくのです。**

**「入り船あれば出船あり」「待てば海路の日和あり」「渡りに船」私たちの人生が旅、とりわけ船旅に例えられることが多いのはことわざの多さからもわかります。日本という国が島国で日常的に船を使うことが多いために想像をしやすいことがあるのかもしれません。**

**教会もまた昔から船に例えられてきました。本日のノアの箱舟もそうですし、福音書には弟子たちがイエス様が一緒に船に乗っていてくださっているにも関わらずに、激しい嵐にあって慌てふためいてたまらずに寝ているイエス様を起こして「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言ったら、イエス様は起き上がり風を𠮟り、湖に「黙れ、静まれ」と言われると風がやみすっかり凪になったことが記されています。**

**そのように教会という船は激しい嵐にあって沈みそうに思い煩ったとしても、共に船に乗ってくださるイエス様が守ってくださる。だからイエス様に信頼して教会は向かい風にあってもほんの少しずつでもその歩みを前に進めていくのです。**

**カイサリアでの裁判を終えて、ようやくパウロはローマに送られることになりました。**

**「その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない。」（23：11）パウロがエルサレムの兵営に捕らえられていた時にイエス様がパウロに現れてこのように語りかけてくださったのがもう2年以上も前です。パウロとしては早くローマに行きたいというはやる気持ちはあったでしょうが、現実の歩みはカイサリアで総督フェリクスのせいで2年間も足止めを食うなど遅々として進まないものでした。それでもパウロは決して腐ることなく、裁判の場などでイエス・キリストの十字架と復活を宣べ伝えて闇から光へと導かれたその喜びを証しをしたのです。それは一人でも多くのユダヤ人や異邦人が私のようにイエス様と出会って救いへと導かれて闇から光に導かれるように、そのことを祈り願ってパウロは語り続けたのでした。**

**そんなパウロがまさにようやくローマに向かって船出をするのです。パウロ、そしてわたしたち、すなわち使徒言行録を記している医者のルカ、そしてテサロニケ出身のマケドニア人アリスタルコ、少なくともこの3人がローマを目指して旅立ちの時を迎えました。ただ、ローマ行きの直行便がなかったのか、アジア州沿岸の各地に寄港する船に乗りました。この航海の様子は巻末の地図「９パウロのローマへ旅」を見ていただくとよく分かります。カイサリアから、シドン、そしてキプロス島の内側を通ってリキア州のミラに到着します。なぜわざわざキプロス島の内側を通ったかと言いますと、向かい風つまり北西からの風が強くて風をよけるためにぐるっと回ってミラに到着しました。**

**そして、そのミラという港町でイタリアに行くアレクサンドリアの船を見つけてパウロたちは乗り込ませられました。このイタリアに行くアレクサンドリアの船ですが、さっきの地図のエジプトという文字のあたりにアレクサンドリアという都市があって、そこから真北のミラを経由してイタリアのローマに向かう商船、貨物船です。この貨物船はかなり大きな船のようで先の37節によりますとこの船には乗員乗客276人であり、さらに多くの貨物がありますのでこの当時のかなり大きな船であることがわかります。今みたいにディーゼルエンジンが動力ではありません。動力は風のみです。大きな柱に大きな帆をかけてあるです。**

**ある資料にはこのように記されています。「パウロの時代は、客船がなく、貨物船での旅だった。船旅は、に張った小さなテントで眠り、食事は自分で用意する不便なものだった。羅針盤さえなく、船の操作は視覚が頼りだった。帆船は追い風が吹けば、一日に150キロ、風がないときは、25～30キロほど進み、速度は風任せだった。」**

**この文章によるとこの時代の船旅がいかに過酷で命がけのものであるかがわかります。今の私たちみたいに海外に飛行機でひとっとびでもなければ大きなフェリーや豪華客船で優雅な旅というものとは全く異なるものです。パウロの時代の船旅のカギを握っているのが「風」なのです。**

**パウロたちが乗ったローマ行きの貨物船は7節によると「風に行く手を阻まれ」て船足ははかどりませんでした。この「風に行く手を阻まれ」と訳されている文章は直訳すると「風は私たちが近づくことを許さず」です。風が許さない、何か風に意思があるような文章です。パウロたちの航行を許さなかった風のために貨物船はクニドス港からクレタ島の北側を通る最短ルートを諦めて、クレタ島のサルモネ岬を回って「良い港」と呼ばれる港にようやくたどり着きました。**

**9節によると、かなりの時間を過ごし既に断食日も過ぎていて、航海はもう危険であったとあります。この断食日はユダヤ教の大贖罪日のことで、9月下旬から10月上旬の頃です。季節はこれから冬に向かいます。地中海はさらに強風が吹き海が大荒れになるので、古代人は春先の3月までは航海を中断していたそうです。**

**パウロは今「良い港」にいます。カイサリアから「良い港」に恐らく数か月かかっています。今私たちがここを読む時、カタカナが多くて読みにくくてもどかしい思いを持つかもしれませんが、実際にこのパウロのローマへの船旅は実にもどかしいのです。キプロス島を回りこまないといけないし、大型貨物船に乗り換えなければいけないし、その大型貨物船も風が近づくのを許さなかったために今度はクレタ島をぐるっと回りこまないといけないというこれまた遅々として進まない非常にもどかしい船旅でした。**

**パウロはそのもどかしさの中、風が前に進むことを許さずに大きく回り道をしなければならないことの中に神様の御心を見たのです。パウロは言います「皆さん、わたしの見るところでは、この航海は積み荷や船体ばかりでなく、わたしたち自身にも危険と多大の損失をもたらすことになります。」（10節）そう、パウロが見たのはイエス様でしょう。ローマに行けと命じられたイエス様ですが、この前に進まない航海をどう考えてもイエス様が前に進むのを許されていない。何かここにお考えがあるに違いない。このまま人の思いを優先させてこの航海を進めることは危険だ。だから「良い港」に留まるべきだ。ここに留まることが神様の御心なんだ。そういう風なことをパウロは言ったのです。**

**しかし、この船は商船、貨物船です。なるべく早くしかも安全にローマにたどり着かないとは商売になりません。そして船長は船旅のプロ、海のプロです。海の事は海の男に任せろと言わんばかりに、長年の経験と知識と勘からここ「良い港」は寒い冬を越すのに適していないので、ここから100キロほど離れた同じクレタ島のフェニスク港に行ってそこで冬を越すことを百人隊長に忠告したのです。パウロは海については全くの素人です。いくら船旅を幾度も経験しても所詮は素人に過ぎません。一方船長も船主も海のプロ。このどちらの言い分を信用するかと言われれば、やはり餅は餅屋とばかりに海のプロである船長と船主の言葉を信用するのはやむを得ないことです。こうしてパウロの乗った貨物船はフェニクス港に向かって出発することになったのです。その結果どうなったかと言いますと、「エウラキロン」と呼ばれる地中海特有の暴風によって難破してしまうのです。**

**この物語は私たちに何を語りかけているのでしょうか。神様は私たちに何を語りかけておられるのでしょうか。**

**本日私たちに与えられています旧約聖書の箇所は創世記6章ノアの箱舟の箇所です。地に悪が満ち神様は人間をお造りになったことを後悔されて洪水を起こすことを決意されました。しかし、ノアだけは神様に従う無垢な人でした。神様はノアに「私は洪水をもたらすからあなたは私が言うとおりに箱舟をつくってその箱舟に入りなさい」と言われました。神様がノアに語られた箱舟の大きさは長さ300アンマ、幅50アンマ、高さ30アンマです。１アンマが約45センチですから。長さ300アンマ＝約120ｍ。幅50アンマ＝約23m。高さ30アンマ＝約14m。これは大体ですがタイタニック号の大きさの半分の大きさです。神様はそのように非常に大きな箱舟をつくるように指示して、そしてノアは神様の言葉に従って箱舟を作ったのです。**

**ノアが大きな箱舟をつくっている時、周りの人たちはこんないい天気で雨も降りそうにないのに大きな箱舟をつくってどうするのかとノアの事をバカにしたことでしょう。周りの人たちは今までの人生の経験から決して洪水など起きない、箱舟なんて必要ないと自分の判断を重んじたと言えるのです。しかし、ノアはどんなに晴天が続いてもどう考えても洪水など起きそうもなくてもひたすらに神様の言葉に聞き従って箱舟を作り続けたのです。ただ神様の言葉に従ったのです。その結果、神様の言葉どおりに洪水が起きてノアと家族と神様が示された動物は箱舟に乗りこんで命が救われたのです。**

**神様の言葉に従うのか、自分の経験や知識や勘につまり自分に従うのか、ノアの箱舟物語と同じように今日の使徒言行録の物語でも同じことが示されているのです。パウロは遅々として進まない航海に今ここに留まることが神様の御心だと見て神様の言葉に従いそのことを百人隊長に忠告したのです。一方、船長や船主は海のプロ、長年の経験と知識と勘、すなわち自分に従うように忠告したのです。**

**神の言葉に従うのか、人の言葉に従うのか、神に従うか人に従うか。神を見るのか人を見るのか。そして神の言葉を聞くのか人の言葉を聞くのか。私たちの人生という船旅において私たちが何に従うか、何を見て何に聞き何に従うことが大切なのかを神様は私たちに語りかけておられるのです。**

**それは教会という船においても同じです。順風満帆な時があります。遅々として進まない歩みがあります。転覆しそうな激しい嵐に会うことがあります。大きく大きく回り道をしなければならないことがあります。大海原で自分たちがどこを漂っているのかわからなくなることもあります。そんな時だからこそ、教会という船は航海の地図であり羅針盤であり舵である神様の御言葉に聞き従うことが大切なのです。神様が今御言葉を通して何を私たちに示そうとしておられるのかをしっかり聞くのです。イエス様の十字架と復活の御言葉です。常に教会という船に一緒に乗ってくださっている十字架と復活のイエス様の御言葉に私たちが聞き従っていくことで教会の歩みは御心に適った歩みを進めていくことができるのです。**